トピックス

十九世紀奇想小説の連鎖と系譜

Mike Ashley, *Out of This World: Science Fiction But Not As You Know It*
(London: British Library, 2011)

橋本　順光

「奇想、天外より落つ」という言葉がある。まるで空の彼方から飛来してきたような奇天烈な着想というものが、啓示のように思い浮かぶことを指す。本書は、SF をそんな彼方の世界をめぐる奇想の系譜として位置づけ、奇想が奇想を呼び、国境と時代を超えて離合集散するパノラマを六つの主題にそって描き出している。なるほど Out of This World とはよく名付けたものだ。「此の世のものとは思えないくらいファンタスティックな」というもう一つの意味通りに（もっとも OED によれば、その字義は 1920 年代アメリカのジャズ用語から来たらしいが）、奇想天外な世界が開陳されるからである。

幸い元となった展覧会を見学する機会があったのだが、大英図書館が開催しただけあって、逸品が惜しげもなく展示されていた。時に当の小説よりも奇想を膨らませ刺激した挿絵も、小冊子ながらほぼ収められている。異世界、パラレルワールド、仮想世界、未来世界、終末論、ユートピアの順に、それらの奇想がどのように生まれ、流布し、現代に流れ込んでいるのか、そんな壮大な宇宙誌が、次々に繰り出される書物の紹介によって明らかにされるのである。二次元世界での冒険を描く *Flatland* (1884) や四次元＝時間の秘密を解明して未来へ行く *The Time Machine* (1895) など、特異に思えた古典も、その前史が無数の作品によって点描され、奇想が呼応し連鎖していく星雲のような流れに位置づけられることで、けっして突然変異の存在ではないことがよくわかった。もとよりアカデミックな研究書でないので注がないのは残念だが、幻想怪奇小説のアンソロジストとし

ても高名な著者ならではの蘊蓄の連続に驚嘆させられること一再ならず、SF の既成概念を心地よく解体し、刺激的に拡大してくれる点で、副題に偽りはない。

ヴィクトリア朝をとりたてて扱うものではないが、十九世紀に転機があったのは明白だ。ちょうど挿絵が国や作家を超えて流布していくように、十九世紀の英国もまたそんな交流と交差のなかにあったという当然の事実が、一読して実感できた。奇想を主人公にしてみればこんな見方もできるのかと、狭義の一国史観がときほぐされる気がしたのである。例えば、普仏戦争に刺激を受けて誕生した 'The Battle of Dorking' (1871) をめぐる記述。これは未来戦記小説の原型として英国のみならず各国で流用されたが、そのドイツ語版ともいえる Rudolf Martin の *Berlin-Bagdad* (*sic*) (1907) は、ドイツ軍が飛行船で世界の空を征する未来を描き、それ故に刊行と同じ年に W.T.Stead の *Review of Reviews* 四月号で詳しく紹介された。ウェルズはその記事に想を得て、*War in the Air* (1908) でドイツと日本の空軍に爆撃される未来を描き、英米との世界大戦が引き起こされると予見した。この英独因縁の連鎖は、そんな夢物語が現実となる悪夢を巧みに示唆して閉じられる。大戦前夜、ドイツの潜水艦が英国を孤立させると警告したドイルの短編 'Danger!'(1914) は、英国では意に介されなかった。しかし、ドイツでは Admiral von Capelle らがそこから実際に海上封鎖のヒントを得たというのである。調べてみると、この逸話は英国でも戦時中すぐに報道されたようで、ドイル自身 *The Wonderings of a Spiritualist* (1921) で誇らしげに記している。

なお本書は日本の事例にほとんど言及しないが、参考文献にある Everett F. Bleiler, *Science-Fiction, the Early Years* (1990) と併せ、横田順彌の『近代日本奇想小説史』(2011) を通読すれば、明治の日本も同じ連鎖を引き起こしていたことがよくわかる。ウェルズよろしく先の *Review of Reviews* 誌の紹介記事を読んだ高野弦月は、翻案『破天荒』(1908) を刊行したが、当然ながらウェルズとは正反対に、英国が衰退した後、米独と共に日本が世界の覇権を握る未来を楽天的に語った。『近代日本奇想小説史』で、日本の記述は高野が追加したものだろうとあるが、I. F. Clarke (ed.), *The Great War with Germany, 1890–1914* (1997) 所収の Stead の記事を見る

と、日本が中国を征服して東アジアブロックを形成するとあるので、これらの記述を膨らませたのだろう。こうした奇想小説の一部は日本では政治小説として隆盛したが、それに感化されたのが、本書でも言及のある梁啓超の『新中国未来記』(1902) である。狭間直樹編『共同研究 梁啓超』(1999) によれば、末広鉄腸の『二十三年未来記』(1886) などを参考にしたらしい。本書によれば、未完の『新中国未来記』を引き継ぐように陸士諤『新中国』(1910) や碧荷館主人の『新紀元』(1909) が書かれたという。前者は上海で万博が開かれる未来を夢想し、百年後に実現した上海万博で温家宝総理が言及したことで有名だが、後者は、繁栄した中国が世界大戦で勝利し、大帝国を世界に確立する未来を描く。ディストピアがユートピアに反転するとは本書のいうところだが、それだけ奇想の連鎖は瞬くまに世界をめぐったともいえるだろう。

同時代的な連鎖反応だけでなく、十九世紀奇想小説の継承という点でも本書は示唆に富む。スチームパンクなど、ネオ・ヴィクトリアニズム以外の何者でもないだろう。ほかにも十九世紀の遺産は、水脈のように意外なところで顔をのぞかせている。Harold Nicolson が外交官を辞して後に発表した小説 *Public Faces* (1932) はその一例。近未来、英国は核爆弾（この用語自体、初出はウェルズの *The World Set Free*, 1914 である）を開発するも、カリブ海で爆発事故を起こしてしまう。その時の大津波で、メキシコ湾流の流れが変わり、ヨーロッパは寒冷化、文明世界の非武装化が起こるというのだ。これなど 19 世紀の英米でしばしば話題となり、ひょっとしてパナマ運河の開通によって引き起こされるのではと噂された英国終焉のシナリオを、実のところ多く引き継ぐ。思えば歴史家マコーレーは、早くも 1840 年の段階で、英国が崩壊し、ニュージーランドの男が廃墟の聖ポール寺院を訪れてスケッチするという可能性を夢想した。この奇想はドレの『ロンドン巡礼』(1872) の一枚になったことで有名だが、幻視はそんなふうに世界とジャンルを軽々と越境していく。本書の描くそんな夢の跡を、マコーレーの故事にならって眺めるのも一興だろう。